

## 学長挨拶

高阪 薫

皆さん、こんにちは。ものすごく暑いというか、炎暑か猛暑か、ここに歩いてくるだけで汗びしょびしょで、皆さんも暑い中御熱心にお出ましくださいましてありがとうございます。

今日のこのシンポジウムは、「公開シンポジウム第一〇回 父親の子育て母親の子育て——自立する親と子のための健全な分離とは——」という問題でありますけれども、私は父親の子育ては済ませましたけれども、孫がおりました、息子夫婦に子どもを預けられて、時々子育てのお手伝いをしていますので、現在はおじいさんの子育て、おばあさんの子育てをしています。私たちの世代はどうも損しております。なぜかというと、親父、お袋を見届ける、あるいは同世代で老々介護をやっている。それから、いまだに甘えてくる子どもたちの面倒を見ている。その孫まで世話している。同僚の奥さんでも、いまだに娘、息子さんのところに行って子育てをやっている。

ここでは限定されて、「父親」「母親」と言っているけれども、

じいさんばあさんの子育てもあるんだということは改めてこれから考えていかなきゃならない問題だろうと思うんですね。この間も話してきましたけれども、例えば神戸市は一五〇万人の人口がいるけれども、二〇年後には三分の一が高齢者になります。ますます少子高齢化になると、子どもたちがものすごく大事に育てられる結果、老人の子育てはかなり現実的にもっともつと必要な度合いを高めてくるんじゃないかと思うんです。

子育ては人間に限ったことではなくて、すべて動植物、生物に普遍的、一般的な問題でもあります。育てるという問題に関して、日本の文献ではどういうところから「育てる」が始まっているんだろうかと思って考えてみたら、思い出すのは『万葉集』の山上憶良の「銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも」の歌です。これは、銀も金も宝石もいいけれども、それよりもずっといいのは子であろうと子どもを愛でた歌です。山上憶良は百済系の帰化人説もありますが、筑前の守として太宰府に勤めた役人です。それで、『子を思ふ歌』など子どもの歌を随分作っているんです。有名なのは、当時の農民など社会的弱者を鋭く歌った貧窮問答歌という長歌です。彼は、老人になつてから子どもの歌をたくさん作るようになりました。だいたい六〇代後半からです。六五歳後半というところと私もまさにそうなんです。なぜ老人になつてから子どもの歌をたくさん作るのか。実は、彼もいとし子を思い、子育てに非常に関心を持

つていたわけです。今から一三〇〇年くらい前の七三三年に太宰府に勤めていたときに宴席があつたんですね。大伴旅人という酒好きの歌人がおりますね。讃酒歌をうたった人ですが、この人も主賓の一人でした。これは百官うちそろつた公的な宴席です。ところが、中座しなければならなくなった。その言い訳に「私は今すぐ戻らなければならぬ。なぜなら子どもが泣いているから。そして母も待っているから、私はすぐ戻らせていただきます」と一首歌って、母子の待つ家にそそくさと帰っていったというんですね。これはどうも親の子育てに関係している歌ですが、一説には宴から逃げ出す口実の歌ともいわれます。しかし何よりも子どもがかわい。非常に慈愛あふれる歌だと思います。その歌は「憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も我を待つらむぞ」というものです。これこそ文献に見られる万葉時代の老いたる父親が、子育てのために公的な宴席から離れて中座する例なんですね。

その後、男の子育てというのか、父親の子育てがどういう形であるか、延々と文献上続くんであらうと思うんですけども、明治時代になってからはとかく男が立身出世を目指し、家制的な国家社会というのができて、女性のほうが良妻賢母型になって、男女七歳にして席を同じうせずで、嫁いでは夫に従い、老いては子に従うという感じになりました。男は一方で国のために、社会のために、戦後は会社のために忙殺されて、子育ては

男の手から離れていきました。

最近では、イクメンではなくてイクメンと言うらしいですけども、男性が積極的に子育てに参加する。育児・介護休業法の改正もあつたようです。働く女性も増えてきたので共同で育てようということが当たり前になっております。それは時代の進化だと思つて、結構なことだと思っております。だから、私は今孫の子育てというのは十分納得してやっているわけでありませう。やっぱり「まされる宝子にしかめやも」という精神です。これを忘れずに子育てをやらなきゃいけないと思つておる次第であります。こういうことでお話を終わらせていただきます。本日は研究のご成果を期待しまして、挨拶に代えさせていただきます。